

喪失した固有文化の奪還

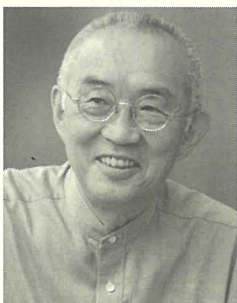
東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男

消滅寸前の邦楽

オリコンが発表した二〇〇六年度の音楽のシングル売上順位によると、一位はKAT-TUNの「Real Face」、二位はレミオロメンの「粉雪」で、百位以内では題名が英語のものが五三、うちアルファベット表記の楽曲は四六とほぼ半分になっている。同様に名前が英語の歌手は六三、うちアルファベットの名前が五三と、これも半分以上である。

どこの地域の統計かと疑問もたれるかもしれないが、日本の歌手の日本国内での売上げである。

ちなみに純粹に日本の音楽かどうかは異論があるにしても、演歌は氷川きよしの「一剣」が七六番目、水森かおりの「熊野古道」が八四番目に登場するだけである。さらに一人の歌手の楽曲を一枚にしたアルバムでは、英語の題名は九一（アルファベット表記七七）、名前が英語の歌



手は七二（アルファベット表記四二）と、英語はいっそう躍進する。日本の音楽、日本の名前は消滅寸前である。これは最近の傾向であるが、起源は明治時代にある。

明治初期に初等教育で唱歌を教科とするとき、洋楽にするか邦楽にするかの論争があったが、西欧に留学した役人の意見で洋楽となり、邦楽は抹殺された。さらに明治二〇年一〇月に国立の東京音楽学校が創設されたが、邦楽の学科は存在せず、正式の学科になったのは四九年後のことであった。日本は初等教育や国立の音楽学校で自国の音楽の教育や研究をしない唯一の国家となり、その成果が一二〇年後のオリコンの順位に反映しているのである。

英語公用語論の台頭

最近、政府は初等教育で英語の授業を必修にする議論をし、一部には英語を第二公用言語とする意見もある。しかし、これは最初のことではない。初代文部大臣・森有禮は「日本の教育」という英語の論文で「英語化論を発表し、作家・志賀直哉は敗戦直後に「国語問題」という論考で、国語としてフランス語採用論を提案している。さらに文化人類学者・梅棹忠夫はローマ字推進論を主張し、仮名文字タイプライターの採

用まで提案している。

現在でも、何人もの論者が英語の習得は国民必須の課題という意見を展開しているが、これらの動向には共通する特徴がある。第一は明治維新、世界大戦敗戦、バブル経済崩壊という日本が危機もしくは転換の時期に登場する議論であり、第二は推進論者が長年、西欧での留学や仕事を経験した人々ということである。東京音楽学校の初代校長・伊沢修二は政府からの派遣によりアメリカで一年学習し、最近の推進論者の多数は海外駐在の新聞記者や商社社員である。

それらの人々が海外での経験から英語の必要を痛感したことは事実であるし、海外との交渉をする仕事に就業する人々にとって英語は必須の手段であることも事実であるが、多数の日本国民にとって、人生の相当の時間を消費して英語を習得する必要があるかは疑問である。その時間を英語で表現する内容を学習することに充当するほうが重要であるし、その期間に喪失するものを確認することのほうがさらに重要である。

喪失したものの奪還

「あでやか」「たおやか」「しなやか」「しとやか」など、大和言葉と分類される表現がある。これらを英語に翻訳できなくはないが、「たおやか」をグレースフルと翻訳しても我々が実感する感覚とは程遠い。巧妙に歌唱する外国人の演歌に我々は拍手するが、日本の歌手の歌唱とは相違している。この差異こそが日本を日本たらしめている根源であり、音楽や言語を変換することにより、その根源を喪失するわけにはいかない。

明治の開国で彼我の格差に驚嘆した祖先は、文明開化、脱亜入欧などの目標により、日本固有の文物を一気に西欧の文物に置換した。その効果により日本が世界一流に到達できたことは事実であるが、一方で喪失した文物も多大であった。情報の基本は他者との相違にあり、情報社会の価値は独自にあるとすれば、洋楽や英語を推進して画一をめざすのではなく、喪失したものを奪還していくことが多様になることこそ重要なのである。